



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Tungusic from the Perspective of Areal Linguistics : Focusing on the Bikin Dialect of Udihe [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	白, 尚燁
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12069号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61555
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Baek_Sangyub_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 白 尚 燁

学位論文題名

Tungusic from the Perspective of Areal Linguistics:

Focusing on the Bikin Dialect of Udihe

(地域言語学的観点から見たツングース諸語—ウデヘ語のビキン方言を中心に)

ツングース諸語は、東シベリアからロシア極東・中国東北・新疆ウイグル自治区にかけて分布する、12 ほどの同系言語からなる。本論文は、ロシア極東に位置するウデヘ語のビキン方言を中心に、ツングース諸語における言語間の統語的相違と地域的分布が関連していることを示し、同現象が周辺言語との接触に起因する可能性を提示する。

本論文の全体的な構成は次のようである。第 1 章において、ツングース諸語と周辺言語の概観、本研究の理論的前提である地域言語学の定義、研究資料について紹介する。第 2 章では、地域言語学理論に基づいたツングース諸語に関する先行研究を整理し、先行研究における問題点を提起する。第 3 章では、ツングース諸語の定動詞における 3 人称標示の相違を地域言語学的観点から論じる。第 4 章では、ツングース諸語の副動詞語尾 **-mi* について言語間の相違を明らかにし、周辺言語における非完了副動詞との関連性を検討する。第 5 章は、条件文の通言語的パラメータを用いた、条件形の相違についての考察である。第 6 章では、ツングース諸語の相関構文における統語的相違がロシア語と中国語による影響である可能性を地域類型論的観点から分析する。第 7 章において、本研究の成果をまとめ、本論文を結論付ける。本論文で取り上げた 4 つの統語現象と本研究の結論に関して、以下にその詳細を述べる。

第一に、動詞述語構造の 3 人称標示における数の対立に基づき、(i) 義務的対立型、(ii) 任意的対立型、(iii) 非対立型、(iv) 人称非標示型の 4 つの類型的パラメータをたて、定動詞における 3 人称標示の相違と周辺言語の関連性について考察した。その結果、北ツングース諸語は常に 3 人称の単・複数が明確に区別される義務的対立型で、これは隣接しているコリマ・ユカギール語、サハ語、ロシア語にも同様に見られる。次に、ロシア極東に分布する東ツングース諸語は、すべて任意的な要素を用いて 3 人称複数を示す任意的対立型として分類される。同現象は、近隣言語であるモンゴル諸語（ブリヤート語とダグール語）の 3 人称標示と一致している。最後に、中国領に分布する南ツングース諸語は、ソロン語、ホジェン語と満洲語、シベ語の 2 つに分かれ、それぞれ非対立型と人称非標示型に属する。ソロン語とホジェン語は、同じく中国領に分布するカザフ語とウイグル語のように、3 人称単数と複数の弁別が欠如している。南ツングース諸語のうち、もっとも南に位置する満洲語とシベ語は、動詞述語に人称が標示されない人称非標示型で、このような文法現象は隣接するハルハ・モンゴル語や中国語にも同様に確認できる。したがって、ツングース諸語の定動詞における 3 人称標示は、地域的分布によって異なるパターンが見られ、同統語現象には周辺言語との接触による可能性を考えることができる。

第二に、ツングース諸語のもっとも基本的な副動詞 **-mi*（連用形「～し（ながら）」ほか多様な用法をもつ）の通言語的パラメータとして、(i) 形態・統語（人称標示、数標示、指示転換、補助動詞構造、発話動詞による補文標識）、および(ii) 意味（同時、先行、理由、目的、条件）の両面を取り入れ、言語間の相違と周辺言語の状況について検討した。その結果、南ツングース諸語の副動詞語尾 **-mi* は、上の多くの点でモンゴル諸語の非完了副動詞語尾 **-ju* と共通しており、またある点では中国語とも類似した文法現象が観察される。いっぽう、北ツングース諸語では、とくにエウエン語とサハ語、コリマ・ユカギール語との間での類似が注意されるとともに、ある点ではモンゴル諸語との類似も観察される。さらに、東ツングース諸語に関しては、部分的にモンゴル諸語や中国語との類似が確認できる。こうした点で、ツングース諸語の副動詞語尾 **-mi* は、その地域的分布によって異なる言語特徴のパターンを示し、このことは周辺言語から異なる度合いで影響を受けた結果であると考えられる。

第三に、条件文の通言語的パラメータ (i) 指示転換と(ii) 意味類型) に基づき、ツングース諸語における条件形式の相違を地域言語学的観点から分析した。その結果、北ツングース諸語の条件形には、条件文の意味類型と関係なく、もっぱら指示転換による対立のみ見られる。しかし、中国領に話される南ツングース諸語には、このような指示転換による条件形の使い分けが全く見られない。また、南ツングース諸語は、コピュラ動詞による条件副動詞形が条件小詞として機能することも共通している。これらの特徴は、近隣言語であるモンゴル諸語の条件形と重なることが多い。最後に、北と南の中間に位置する東ツングース諸語には、主に現実条件を構成する条件副動詞に指示転換の対立が存在する。さらに、東ツングース諸語は、DS (異主語) 条件副動詞*-rAk-の有無によって2つのグループに分かれる。まず、同形式が欠如している東ツングース諸語には、すべてコピュラ動詞に基づいた条件小詞が発達している。この条件形式は、その統語構造や機能において、モンゴル諸語の条件小詞と部分的に類似している。一方、DS 条件副動詞*-rAk-の保持している東ツングース諸語は、原則的に指示転換の対立が守られている。つまり、ツングース諸語の条件形は、その地域的分布によって異なる統語特徴が見られ、これは周辺言語であるモンゴル諸語からの影響であると考えられる。さらに、東ツングース諸語に関しては、DS 条件副動詞*-rAk-の欠如とモンゴル諸語からの部分的影響が両方関わっている可能性がある。

第四に、ツングース諸語の相関構文における統語的相違を示し、これが周辺言語であるロシア語と中国語の影響による可能性を地域言語学的観点から論じた。本研究では、相関構文の類型的パラメータとして、(i) 相関構文の対応形式 (疑問詞 WH-疑問詞/疑問詞-指示詞 DEM) と(ii) 従属節の動詞形式 (非終止形/終止形) を取り入れ、ツングース諸語の相関構文における相違について検討した。その結果、ツングース諸語の相関構文は、北ツングース諸語 (典型的相関構文: WH-DEM, 終止形)、東ツングース諸語 (典型的・条件文的相関構文: WH-DEM/WH-WH, 終止形/非終止条件形)、南ツングース諸語 (条件文的相関構文: WH-WH, 非終止条件形) の3つのパターンに分類でき、ツングース諸語の地域的分布に基づいて連続体を成すことが確認できた。このような相関構文の統語的差異は、周辺言語における相関構文の統語特徴 (ロシア語: 典型的相関構文 (WH-DEM, 終止形) / 条件文的相関構文 (中国語: WH-WH, 条件形)) と類似していることから、ロシア語と中国語の影響である可能性が考えられる。

こうした研究成果を踏まえ、ツングース諸語を地域的分布によって、北ツングース諸語、東ツングース諸語、南ツングース諸語の3つのグループに分けて考えることで、上記のような統語的相違とのあいだに明瞭な相関性が指摘できること、さらにその事実がそれぞれ異なる周辺言語による影響、ないし同一周辺言語による影響度合いの相対性によって説明できる可能性を主張した。